

「現地を訪問して想うこと」

1997年 文学部 西洋史専攻卒

秋山 直子

今回、私がこのツアーに参加した目的は、自分の目で現状を見るためでした。私は、阪神・淡路大震災の折、神戸に住んでおり、学生でした。ちょうど試験中だった私は、無事に生きていること、電車が動かず大学へ行くことができないので、残っている試験を受けることができないことを伝えるため、事務室に電話をしました。

すると、返ってきた答えは、「何とか受けに来てもらえませんか」という非情なものでした。私は愕然としました。電車で1時間乗るほどの距離でも、こんなに理解してもらえない……。東日本大震災は、関西から遠く離れたところ、きっと新聞やテレビではわからないことがあるはずだ、それを自分の目で確かめたい、という思いでした。

そして、陸前高田市で、その地に降り立ち、震災ガイドの方のお話を聞くという貴重な体験をさせていただきました。雑草が生い茂る土地に信号機はなく、道にはトラックやダンプカーがひっきりなしに走っている光景。もし、何も知らずにここへ来たのなら、私は、「何もない土地を耕し、新しく町を作ろうとしている。」と、思ったかもしれません。それほどまでに、町のすべてが跡形もなく流され、そこに雑草が生えていたのです。「奇跡の一本松」を見ることができましたが、なんだか悲しげに見えました。流されずに町の中で2つだけ残った建物のうちの1つの屋上には、矢印があり、「津波到達点」と書いてあります。4階の屋上です。想像を超える高さでした。そして、印象的だったのが、防潮堤です。津波から町を守るため、新たに作る防潮堤の高さは、以前よりももちろん高いもの。そうすると、どうなるか。海が見えなくなるのです。見えないことへの恐怖、そして海が見えるから美しい町だったのに・・・という複雑な心境。そしてその街に住み続けるという選択。私は、全く復興が進んでいないという印象を受けると同時に、ただ作り直せばいいだけではない複雑さをようやく感じることができました。募金をしたり、旅行して現地にお金を落としたり、私ができることはそんな事だと思っていました。けれども、今なお「当日のことを思い出すと胸が苦しくなる。」、「本当はあまり当日の話はしたくない。」と語る現地の方の言葉を直接聞いた時、やはり忘れずに思い続け、見守ることも必要で大切だと思いました。なにも、家がたくさん建って、電車が毎日走るようになることが目標ではないのです。美しい海、山、星空、海の幸のある岩手に、悲しい出来事を心に抱えた人たちが明日を見つめて生きているということを皆さんの心にも留めてほしいと思いました。今回は、このような機会を 作ってくださり、ありがとうございました。